

コーピング尺度 (GCQ) 特性版の作成 および信頼性・妥当性の検討

ササキ メグミ ヤマサキ カツユキ
佐々木 恵 山崎 勝之^{2*}

目的 本研究は主に大学生を対象としたストレス・コーピング尺度 (General Coping Questionnaire: GCQ) の特性版の作成とその信頼性, 妥当性の検討を行うことを目的とした。

方法 調査Ⅰから調査Ⅳまで, それぞれ124人, 784人, 83人, 83人の大学生が GCQ 特性版に回答した。質問紙は感情表出, 情緒的サポート希求, 認知的再解釈, 問題解決の4下位尺度, 5件法からなるものだった。調査Ⅳでは, 妥当性の検証のために, GCQ 特性版に加えて仲間評定も行われた。

結果 調査Ⅰでは54項目からなる GCQ 特性版第1版から, 32項目が GCQ 特性版第2版として選定された。調査Ⅱから調査Ⅳでは, GCQ 特性版第2版の尺度の因子的妥当性, 内的整合性, 検査-再検査信頼性, 構成概念妥当性 (認知的再解釈をのぞく), 得点分布の正規性の証拠がそれぞれ得られた。

結論 今後のストレス・コーピング研究を行うための, 4下位尺度からなる GCQ 特性版の標準化がほぼ完了した。

Key words : コーピング尺度 (GCQ) 特性版, 信頼性, 妥当性, 4下位尺度, 大学生

I 緒 言

コーピング研究は, 今世紀初めの精神分析学者による第一世代に引き続き, Lazarus ら^{1,2)}による研究を中心とした第二世代により, これまで盛んに議論がなされてきた³⁾。コーピングとは, 「外的・内的要求やそれらの間の葛藤を, 克服し, 耐え, 軽減するためになされる, 認知的・行動的努力⁴⁾」として定義される。また, 個々のコーピングの方法はコーピング・ストラテジー (coping strategy), 個人内のコーピング・ストラテジーの使用パターンはコーピング・スタイル (coping style) と言われている。近年, この研究領域では, Lazarus ら²⁾によるストレスモデルが, 人が嫌悪的な事態に対処し, 適応していく複雑なプロセスを理解するための有効な理論的枠組みとなってお

り, Folkman ら¹⁾が開発した対処様式測定法 (Ways of Coping Checklist: WCC) と呼ばれるコーピング尺度は, 我が国においてもその改訂版が公刊され⁵⁾, 広く用いられている。

コーピングについては, 現在までに数多くの研究がなされているが, この領域の研究は, 数々の重要な問題が解決されないままに展開されている。その問題は大きく4つに分けることができる。第1に, コーピングのアプローチ方法をめぐり問題があげられる。この分野では, コーピングの安定的側面を重視するアプローチと, 人と状況との相互作用による変動的側面を重視するアプローチとの間で, 研究者の立場が分断している。しかしながら, 適応状態に対する予測力の高さという意味で, どちらのアプローチがより適切かということは未解明の状態にあるので, まず必要なことは, コーピングの安定的側面と, 状況に特異的な側面の双方を検討し, 比較することが可能な, コーピングの概念化および測定にあると言える。近年, これを可能にする方法として, 「普段」のコーピング・ストラテジーの一般的な使用傾向

* 兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科

^{2*} 鳴門教育大学人間形成講座

連絡先: 〒772-8502 徳島県鳴門市鳴門町高島字中島748 鳴門教育大学人間形成講座 佐々木恵

である特性的コーピング (dispositional coping) と、特定の時点の特定のストレスフルな出来事に対して行われる状況的コーピング (situational coping) を、広範囲の状況にあてはまる共通の項目を用いて、教示と反応項目のみ変更して測定するという形式が提案されている⁵⁾。このような汎用性のあるコーピングの概念化や測定方法は、人の適応状態の予測に多様な検討方法を提供するものと考えられる。

第2に、コーピング・ストラテジーの構造をどのようにとらえるかという問題があげられる。現在までに多くのコーピング研究で用いられている Folkman ら¹⁾の WCC は、大きく問題焦点型対処と情動焦点型対処の2種類に分類されることが示されているが、その後 WCC は8因子からなることが示されている^{6,7)}。また、その他の研究^{8~10)}においても WCC が利用されているが、項目が任意に修正されたり、それぞれ特異的な文脈に限った検討がなされていることが、結果の比較を困難にしている。

このような問題をふまえ、コーピング・ストラテジーの構造を整理した上での尺度構成を目指した研究も行われている。Tobin ら¹¹⁾は対処の関わり方は関与的か非関与的か、関わる対象は問題か情動かにより、8下位尺度を設けている。Holanhan ら¹²⁾は、対処の反応系は行動か認知かという次元を取り入れ、3下位尺度を設定している。神村ら¹³⁾はさらに、対処の関わり方は関与的か回避的か、関わる対象は問題か情動か、反応系は行動か認知かにより、8下位尺度からなる尺度を開発している。これらの研究は、接近(あるいは関与)と回避(あるいは非関与)の次元を質的な違いとして扱っている点で共通している。例えば Tobin ら¹¹⁾は接近と回避の次元においてそれぞれ対応する、問題解決 (problem solving) と問題回避 (problem avoidance)、認知的再構成 (cognitive restructuring) と願望的思考 (wishful thinking)、ソーシャル・サポート (social support) と社会的孤立 (social withdrawal)、感情表出 (express emotions) と自責 (self-criticism) の8因子を抽出している。しかし、その項目内容からは、対処の対象や、対処の反応系の次元における対応関係が、質的な違いであるのに対し、接近と回避との対応関係は、対処の関わり方の量的な違いとして

考えることができる。なぜなら、問題回避は問題を解決しようとしなないこと、願望的思考は現実の状況の見方を自らは変えようとしなないこと、社会的孤立は他者からの共感や理解を求めようとしなないこと、自責は感情を外に出さずに自分に向けること、というように、一方から他方を説明することができるためである。また、反応系の次元については、分類の判断基準が不明確な点がある。例えば神村ら¹³⁾の尺度の項目内容を吟味すると、「放棄・諦め」(回避・問題・認知)と「責任転嫁」(回避・問題・行動)とは、反応系のみ異なるものであるが、両者には認知とも行動とも解釈し得る項目が含まれており、実際、相互にかなりの因子負荷量で重複している。したがって、反応系の違いによるコーピング・ストラテジーの明確化は困難であると思われる。

以上を総合すると、コーピング・ストラテジーを明確に構造化するには、Tobin ら¹¹⁾の尺度構成を再検討することが最も妥当であると考えられる。つまり、現象をとらえる大まかなガイドラインとして²⁾、問題へのコーピングと情動へのコーピングを設定し、前者には Tobin ら¹¹⁾の問題解決と認知的再構成にあたるものを、後者には感情表出とソーシャル・サポートにあたるものを下位尺度とし、各々の得点の高低で接近と回避の次元を数量化するということである。この構造は、必ずしも先行研究で扱われてきたコーピング・ストラテジーを網羅しているとは言えないが、Amirkhan¹⁴⁾の指摘にあるように、コーピングに関する一貫した知見がある程度得られるまでは、このレベルでの検討を重ねることが必要であると考えられる。

第3に、尺度の信頼性・妥当性の検討における問題があげられる。Folkman¹⁵⁾はコーピングの変動性を重視する立場から、コーピング尺度についてはパーソナリティ尺度と同等の内的整合性の高さは期待できないとしている。しかし、尺度の信頼性が確認されないままでは、測定対象の変動が、真の変動を意味するのか、測定の不安定性を意味するのかは不確かなものとなるため、コーピング尺度においても、高い内的整合性および時間的安定性が求められる。

また、Amirkhan¹⁶⁾の指摘にあるように、既存のコーピング尺度は、構成概念妥当性の検討が不

充分なまま使用されている^{6~13,17~19)}。したがって、コーピング尺度の開発には、構成概念妥当性をどのように検討すべきか吟味することが求められる。

第4に、既存のコーピング尺度には、ストレス反応（不安・抑うつ・緊張など）の有無を問うものが含まれているという問題があげられる。Stanton ら²⁰⁾は、既存のコーピング尺度^{5,11,21,22)}の中で、特に情動焦点型とされているものの中に、ストレス反応と交絡した項目が混在していることを明示し、両者の測定項目の類似性から、情動焦点型対処は不適応的であるという真でない結論を導く危険性を示唆している。コーピング尺度作成の際にはこの点についても注意しなければならない。

以上を概観すると、海外においても、また、我が国においても同様に、これらの問題を総合的に克服した、研究利用に耐える尺度は存在しないことが明らかである。したがって、本研究では上述の種々の問題点をふまえ、新たな尺度の開発を行った。本稿におけるコーピングの定義は、Folkman ら¹⁾に従うこととし、コーピングの安定的側面と変動的側面の双方を検討可能な項目内容の抽象性を考慮した上で、今後の研究の出発点として、まずは特性尺度の作成を目的とした。そして、Tobin ら¹¹⁾の知見をもとにした、4下位尺度からなる明確な構造化をめざした。一連の調査において、まず当初の項目群からの項目選定を行い、次に選定された項目群についての因子の妥当性、下位尺度の内的整合性の検討、検査-再検査信頼性の検討、構成概念妥当性の検討をそれぞれ行い、尺度の標準化を行うこととした。

II 調査 I

1. 目的

GCQ 特性版の尺度項目の選定を目的とした。

2. 方法

1) 調査協力者

4年制大学学部生126人から調査用紙を回収し、分析に有効な回答は男子学生39人（平均年齢20.15歳，標準偏差.71），女子学生85人（平均年齢19.95歳，標準偏差.61）の計124人であった。

2) 調査材料

先述の尺度の構造化をめざし、嫌悪的な出来事

に直面したとき、それをなんとかして解決しようとする「問題解決」、それを良い方へ考え直したり、自分にとってプラスになることを探そうとする「認知的再解釈」、そのときの気持ちを表情や態度にあらわす「感情表出」、人とのかわりの中で自分の気持ちを落ち着かせようとする「情緒的サポート希求」の4下位尺度を想定し、先行研究における項目とその問題を考慮しながら、55項目のGeneral Coping Questionnaire (GCQ) 特性版原版を作成した。このGCQ 特性版原版の項目文の理解のしやすさ等について、35人の大学院生を対象に聞き取り調査を行い、細部を検討した上で項目の削除、修正、追加をし、54項目のGCQ 特性版(Ver. 1)を作成して調査材料として用いた。

3) 手続き

調査は、事前に講義担当教官に調査項目、実施手続きについて説明し、承諾を得た上で行われ、大学の講義時間内にGCQ (Ver. 1) が記名式で集団実施された。回答のバイアスを最小限にするために研究目的の具体的な説明は調査終了後に行うこと、調査用紙の管理は厳重に行われ、個人のプライバシーは厳守されることを調査協力者に伝え、そのような手続きによる研究に同意する学生に回答を求めた。その上で、「嫌な出来事、困った出来事に直面したとき、日常一般的にどのように行動したり考えたりしているか」、各項目について「まったく行わない」、「あまり行わない」、「ときどき行う」、「よく行う」、「いつも行う」の5件法で回答を求めた。調査に要した時間は約25分であった。調査実施者は調査終了後、本研究はコーピング尺度の開発を目的としており、将来的にコーピングと適応との因果関係を解明するために活用されることを調査協力者に説明した。

4) 分析 分析は124人の有効回答を対象に、統計パッケージSAS (Ver. 6.12, SAS Institute 社) を用いて、基本統計量の算出と、主因子法による因子分析を行った。

3. 結果および考察

1) 反応偏向項目の特定

各項目について、「まったく行わない」、「あまり行わない」の回答頻度の合計、「よく行う」、「いつも行う」の回答頻度の合計のいずれかが、男女ともに全体の60%（男子学生24人，女子学生51人）以上を占めているものを、反応偏向項目の

基準としたが、これを満たす項目はなく、全54項目を以後の分析の対象とした。

2) 項目選定のための分析

因子分析を行った結果、第1因子から第6因子までが1以上の固有値を有したが、固有値の減少の程度から4因子を抽出した。これらの因子は互に関連するものと考えられたため、回転法にはプロマックス回転を採用した。回転前の第1因子から第4因子までの固有値はそれぞれ、男子学生で11.00, 8.37, 6.26, 4.16, 女子学生で11.31, 10.79, 5.07, 3.16, となった。第4因子までの累積寄与率は、男子学生で55.17%, 女子学生で56.17%であった。回転後の因子パターンは第1因子から順に、男子学生では問題解決、情緒的サポート希求、認知的再解釈、感情表出に、女子学生では情緒的サポート希求、問題解決、認知的再解釈、感情表出に、それぞれ解釈されるものとなった。

最終的に男女双方に適用可能な尺度となるよう、(a) 当該因子への因子負荷量が.40以上である、(b) 男女いずれにおいても複数因子に.40以上の因子負荷量で重複しない、(c) 男女で同一の因子に属する、の3点を尺度項目選定の原則基準とし、調査協力者の負担等を考慮し、各下位尺度ごとに8項目を選定した。なお、感情表出の2項目については、(b)の基準を女性においてのみ満たさなかったが、その差がわずかであったため、この時点では尺度項目に残すこととした。以上により、全32項目からなるGCQ特性版(Ver. 2)を作成した。

Ⅲ 調 査 Ⅱ

1. 目的

GCQ特性版(Ver. 2)の因子的妥当性と各下位尺度における内的整合性の検討を行い、32項目中の得点化対象項目を確定し、大学生における標準得点および得点分布の提示を目的とした。

2. 方法

1) 調査協力者

4校の4年制大学学部生808人から調査用紙を回収し、分析に有効な回答は男子学生465人(平均年齢19.47歳, 標準偏差1.12), 女子学生319人(平均年齢19.31歳, 標準偏差1.06), の計784人(平均年齢19.41歳, 標準偏差1.06)であった。

2) 調査材料および手続き

調査Iにより確定したGCQ(Ver. 2)を調査材料として用いた。手続きは調査Iと同様で、調査に要した時間は約20分であった。

3) 分析 784人の有効回答を対象に以下の4点について分析を行った。分析は以下の1)③の確証的因子分析を除き、統計パッケージSAS(Ver. 6.12, SAS Institute社)を用い、1)③については統計パッケージAMOS(Ver. 3.62, Small Water社)を用いて行った。

(1) 因子的妥当性の検討

①主因子法による因子分析: 主因子法による因子分析を行い、因子の抽出を行った。抽出された主因子解については、因子間に相関を仮定するプロマックス回転をかけ、因子の解釈を行った。

②因子間相関: ①で抽出された因子間の相関について検討した。

③確証的因子分析による因子構造の再検討: 本研究で検討対象となっているコーピングの4因子は、それぞれ相互に関連し合うことを仮定した上で、探索的因子分析により抽出された因子である(①参照)が、ここではその因子構造およびモデル適合度を確証的因子分析により検討した。各因子は互いに独立したものとする直交モデルと、すべての因子間に相関を仮定する斜交モデルの2つのモデルについて、比較検討した。

(2) 得点分布の検討

尺度得点分布の正規性を検討するため、下位尺度ごとに得点分布の歪度と尖度を算出した。

(3) 平均得点および性差

下位尺度ごとに全体および男女別の平均得点、標準偏差を算出し、さらに平均得点の男女差のt検定を行った。

(4) 内的整合性の検討

下位尺度内の内的整合性を検討するため、Cronbachの α 係数を算出した。

3. 結果および考察

1) 因子的妥当性の検討

(1) 主因子法による因子分析

分析の結果、第4因子までが1以上の固有値を有し、第5因子以降の固有値の減少の程度が大きかったため、4因子を抽出した。回転前の固有値は第1因子から順に、男子学生で7.08, 5.47, 2.64, 2.11, 女子学生で7.42, 6.21, 2.68, 2.06であった。

第4因子までの累積寄与率は、男子学生で54.06%，女子学生で57.39%であった。回転後の因子パターンは第1因子からそれぞれ、男子学生で感情表出、情緒的サポート希求、認知的再解釈、問題解決に、女子学生で感情表出、認知的再解釈、情緒的サポート希求、問題解決に解釈されるものとなり、男女ともに想定していた因子と異なる因子に該当した項目はなかった。したがってこれ以降は男女込みの全体の結果を報告する。各項目文および因子負荷量を表1に示した。

尺度選定の原則基準として、(a) 当該因子への因子負荷量が.40以上である、(b) 当該因子以外の因子に.40以上の因子負荷量で重複しない、(c) 当該因子と当該因子以外の因子への負荷量との差が.15以上である、ことを設定した。32項目中、項目番号16は基準(a)を、項目番号6と32は基準(b)をそれぞれ満たしていないが、基準値との差がわずかで、後述の内的整合性への影響も小さかったため、32項目すべてを得点化対象項目に選定した。

表1 GCQ 項目文および各項目における因子負荷量

	番号	項 目 文	I	II	III	IV
感情表出 (I)	14	嫌だと感じていることを表情に出す	.889	.315	-.037	.030
	28	思っていることを態度に出す	.863	.296	.028	.045
	20	嫌なのだという態度をとる	.823	.237	-.030	.009
	23	自分の気持ちを表情にあらわす	.845	.360	.043	.066
	2	不快を感じていることを態度であらわす	.793	.280	-.027	.033
	31	困っているという顔をする	.754	.385	-.008	-.014
	9	やりきれなさを態度に出す	.684	.387	-.035	-.014
	*5	思っていることを顔に出さないようにする	.531	.205	-.060	-.035
情緒的 サポート希求 (II)	12	身近な人に励ましてもらう	.339	.882	.082	.152
	30	親しい人に気持ちの支えになってもらう	.295	.866	.102	.146
	15	だれかにあたたかい言葉をかけてもらおうとする	.340	.815	.062	.055
	3	だれかになぐさめてもらう	.360	.819	.020	.064
	18	自分の気持ちを親しい人に受け止めてもらう	.297	.813	.135	.174
	21	だれかと一緒にいて安心感を得ようとする	.229	.658	.141	.161
	8	友人に自分の立場を分かってもらう	.300	.598	.158	.154
	*25	人を頼らないようにする	.151	.415	-.021	-.057
認知的再解釈 (III)	27	状況の明るい面を見ようとする	-.024	.119	.831	.338
	24	問題について良い方向へ解釈しようとする	.013	.115	.793	.282
	4	問題の中で明るい要素を探そうとする	.018	.154	.725	.295
	32	悪い事態の中でも希望がもてそうなところに着目する	-.004	.079	.774	.426
	17	経験していることの中で良い点を見ようとする	-.002	.160	.749	.360
	10	嫌な経験の中でも望ましい点に目を向ける	-.011	.074	.718	.342
	7	起こった出来事を肯定的に捉えようとする	-.040	-.010	.659	.280
	13	事態について肯定的に受け止める	-.058	-.034	.651	.358
問題解決 (IV)	26	起こった出来事が解決へ向かうように懸命に取り組む	.007	.073	.377	.850
	19	問題解決に専念する	.033	.088	.243	.712
	22	悪い状況を打開しようといろいろ試してみる	.064	.085	.395	.767
	11	状況が変わるように手をつくす	.063	.119	.325	.711
	29	困難な状況を変えるために最善の方法をとろうとする	.028	.114	.394	.733
	1	困難を乗り越えるために努力する	.002	.144	.239	.662
	6	事態が悪化しないように積極的にはたらきかける	-.041	.182	.403	.591
	*16	直面している状況に対してはたらきかけないようにする	-.097	-.030	.138	.323

注) *は逆転項目 (逆転処理済み) これ以降の表内における因子名の略記号は本表に準ずる

以上により、尺度の因子的妥当性が認められ、4下位尺度、各8項目、全32項目からなるGCQ特性版が確定した。これ以降調査Ⅱで確定した項目群からなる尺度をGCQ特性版と表記する。

(2) 因子間相関

GCQ特性版の4因子間の相関係数が表2に示されている。感情表出と情緒的サポート希求、認知的再解釈と問題解決のそれぞれの間の相関が相対的に高いものとなり、情動へのコーピングとして想定した2因子と、問題へのコーピングとして想定した2因子とが、相対的に強い関連性をもつことが明らかとなった。

(3) 確証的因子分析による因子構造の再検討

表3に各モデルの適合度指標が示されている。豊田²³⁾による説明をもとに検討すると、斜交モデルは直交モデルよりも、赤池情報量規準 (Akaike information criterion: AIC) において小さい値を示し、より適合度が高いことが示唆された。斜交モデルにおける適合度指標 (goodness of fit index: GFI)、修正適合度指標 (adjusted goodness of fit index: AGFI) はそれぞれ .85を越え、さらに、モデルの採択の基準とされる RMSEA (root mean square error of approximation) は .053となり、高いモデルの適合を示した。また、当該因子への影響指数は32項目中30項目で .50以上の値となった。以上により、GCQ特性版は斜交モデルによって、標本分散共分散行列が最もよく説明されることが示唆され、その因子的妥当性が再確認された。

2) 得点分布の検討

分析の結果が表4に示されている。いずれの尺度においても歪度および尖度は-1.0から+1.0までの範囲の値となり、得点分布の正規性が示唆された。

3) 平均得点および性差

分析の結果が表5に示されている。平均得点は

表2 因子間相関

	I	II	III
II	.374		
III	-.015	.115	
IV	.029	.143	.441

表3 GCQのモデル適合度

	カイ二乗値	GFI	AGFI	RMSEA	AIC
直交モデル	1755.212	.879	.862	.060	1883.212
斜交モデル	1464.927	.895	.880	.053	1615.172

情緒的サポート希求において女子学生が男子学生よりも有意に高く、また、問題解決において男子学生が女子学生よりも有意に高かった。

4) 内的整合性の検討

分析の結果、各下位尺度のCronbachの α 係数は、全体、男子学生、女子学生、の順に、感情表出で .92, .91, .93, 情緒的サポート希求で .90, .89, .91, 認知的再解釈で .91, .90, .92, 問題解決で .86, .87, .86となり、いずれの下位尺度においても十分な内的整合性が明らかにされた。

Ⅳ 調査Ⅲ

1. 目的

GCQの検査-再検査信頼性の検討を目的とした。

2. 方法

1) 調査協力者

調査協力者は4年制大学学部生で、第1回目は130人 (有効回答110人)、第2回目は102人 (有効回答87人) の学生から調査用紙を回収し、2回の調査双方で有効回答が得られた83人 (男子学生25人、女子学生58人、平均年齢18.25歳、標準偏

表4 GCQ下位尺度ごとの得点分布の歪度および尖度

	I		II		III		IV	
	歪度	尖度	歪度	尖度	歪度	尖度	歪度	尖度
全体	.267	-.405	-.009	-.505	-.081	-.119	.053	-.132
男子学生	.340	-.329	.166	-.213	-.209	.037	-.072	-.066
女子学生	.165	-.462	-.257	-.472	.112	-.478	.213	-.141

表5 GCQ下位尺度ごとの平均得点と性差

	I	II	III	IV
全体 (n=784)	23.043 (6.337)	24.311 (6.606)	25.816 (6.126)	26.432 (5.111)
男子学生 (n=465)	22.735 (6.367)	22.501 (6.308)	26.045 (6.197)	26.896 (5.261)
女子学生 (n=319)	23.492 (6.277)	26.949 (6.133)	25.482 (6.016)	25.755 (4.812)
性差 t(782)	1.644	9.809**	1.263	3.088**

** $P < .01$ 括弧内は標準偏差

差.49)が分析対象となった。

2) 調査材料および手続き

調査材料はGCQ特性版32項目で、第1回目と第2回目の検査間隔は約9週間であった。この時間間隔は、従来の心理測定尺度開発において採用されている、平均的なものである。その他の手続きは基本的に調査I・IIと同様であった。第2回目の調査終了後には、2回の調査はコピーングの時間的安定性を検討し、尺度の信頼性を明らかにすることが目的であることを調査協力者に伝えた。

3) 分析 分析は83人の有効回答を対象に、統計パッケージSAS (Ver. 6.12, SAS Institute 社)を用いて、下位尺度ごとに2回の調査における得点のピアソンの相関係数を算出した。

3. 結果および考察

分析の結果、2回の調査における得点のピアソン相関係数は、全体、男子学生、女子学生の順に、感情表出で.755, .863, .682, 情緒的サポート希求で.812, .791, .758, 認知的再解釈で.744, .858, .652, 問題解決で.671, .694, .628となり、問題解決で相対的に低めではあったが、全体として十分な時間的安定性が示された。

V 調査 IV

1. 目的

GCQの構成概念妥当性を検討することを目的とした。

2. 方法

1) 調査協力者

4年制大学学部2年生以上で、ゼミ、サークルなどの5人から20人の範囲のグループに属す学生84人から調査用紙を回収し、分析に有効な回答は男子学生34人(平均年齢20.74歳、標準偏差

1.24)、女子学生49人(平均年齢20.82歳、標準偏差1.01)の計83人であった。

2) 調査材料および手続き

調査材料としてGCQ特性版および仲間評定用紙を用いた。GCQ特性版では調査協力者各自についての回答を求めた。仲間評定用紙にはGCQ特性版の各下位尺度の構成概念を表した一文が冒頭にあげられ、自分以外のグループの構成員にそれがどの程度あてはまるか、5件法で評定を求めた。調査用紙は個別に配布し、厳封の上で後日回収した。この仲間評定法は、被評定者をよく知る複数の他者による日常の行動観察を数量化し、測定するもので、Amirkhan¹⁶⁾の指摘にある構成概念妥当性の検討を可能にする方法と考えられる。Amirkhan¹⁶⁾(研究1)は、実験場面でコーピング尺度の構成概念について検討しているが、本研究では、特異的な実験場面よりも日常の行動をより反映し得るものとしてこの方法を採用した。調査に先がけては、各グループの代表者に調査についての説明をし、各自の評定について他の構成員に知られることはないこと、調査用紙の管理は厳重に行い、個人のプライバシーは厳守されることを調査協力者に伝え、グループ構成員に承諾を得た。

3) 分析

分析は83人の有効回答を対象に、統計パッケージSAS (Ver. 6.12, SAS Institute 社)を用いて行った。83人のうち、男女別で下位尺度得点の第3四分位数以上の得点者を高群、第1四分位数以下の得点者を低群とした。仲間評定については、所属グループの構成員からの評定の平均得点を対象者の仲間評定得点とした。仲間評定得点を従属変数として、下位尺度ごとに性別×群の2要因分散分析を行った。

3. 結果および考察

分析結果が表6に示されている。感情表出、情緒的サポート希求、問題解決において群の主効果が有意となり、それぞれ、GCQ特性版得点高群は低群よりも仲間評定得点が有意に高いことが示された。性の主効果は感情表出においてのみ有意で、女子学生が男子学生よりも高得点であることが示された。交互作用はいずれも有意でなかった。

以上のように、感情表出、情緒的サポート希求、問題解決におけるGCQ特性版得点が高い人

表6 GCQ 仲間評定得点における GCQ 下位尺度高群・低群間の平均値の比較

		I		II		III		IV	
		高群	低群	高群	低群	高群	低群	高群	低群
n	男子学生	9	9	9	10	11	11	9	9
	女子学生	13	13	15	13	14	13	14	14
M	男子学生	3.488	2.788	3.022	2.970	3.263	3.118	3.533	3.255
	女子学生	3.030	2.523	3.433	2.938	3.414	3.215	3.685	3.035
SD	男子学生	.689	.358	.511	.512	.473	.312	.346	.593
	女子学生	.528	.358	.308	.469	.287	.441	.371	.460
群		$F(1, 40) = 15.91^{**}$		$F(1, 43) = 5.94^{*}$		$F(1, 45) = 2.54$		$F(1, 42) = 14.75^{**}$	
性		$F(1, 40) = 5.86^{*}$		$F(1, 43) = 2.06$		$F(1, 45) = 1.27$		$F(1, 42) = .06$	

** $P < .01$ * $P < .05$

は、複数の第三者による客観的な観察においてもその特性が高いと評定された。したがってこれらの下位尺度については対象となる構成概念を測定していることが確認された。認知的再解釈のみ例外となり、コーピング尺度における構成概念妥当性の検討課題が一部残された。

Ⅵ 総合考察

本研究の一連の調査により、GCQ 特性版の尺度項目が確定した。そして、一部検討課題が残されたものの、その因子の妥当性、下位尺度の内的整合性、検査-再検査信頼性、構成概念妥当性などの証拠が示され、特性的コーピングを測定する尺度がほぼ完成した。

冒頭で述べられた既存のコーピング尺度の4つの問題のうち、コーピングのアプローチ方法に関して、Aldwin²⁴⁾はコーピングの長期的な効果を検討するにはコーピング・スタイルを重視するアプローチが、短期的な効果を検討するにはコーピングの変動を重視するアプローチが適しているのではないかと述べている。しかし、どのようなアプローチが最も適応状態に対する予測力をもつのかということは未解明の問題であるため、GCQにおいても、GCQ 特性版により測定される特性的コーピングと、今後開発予定のGCQ 状況版により測定される状況的コーピングが、コーピングの測定と同時点における、あるいは将来における適応状態をどの程度予測し得るのかを明らかにすることが、今後の第1の検討課題としてあげられる。また、この点に関連し、本研究における広範

困の状況にあてはまる質問項目は、その内容が抽象的過ぎるという批判も予測されるが、項目内容の具体性が増すほど、コーピングの状況間の比較や、一般的な傾向をとらえることは不可能になるため、項目内容の抽象性を保つ必要があると考えられる。

また、第2の問題であるコーピング・ストラテジーの構造については、本研究においては想定した4因子構造の妥当性が示されたが、今後、研究を重ねる中で、どの程度一貫した結論がこの4因子について得られるのか注目される。

さらに、第3の問題である尺度の信頼性と妥当性に関連し、本研究では、GCQ 特性版4下位尺度において、Cronbachの α 係数で.90前後の高い数値が示された。この値はパーソナリティ尺度に求められる水準とほぼ同等と考えられる。本研究では特性的コーピングを測定する尺度開発を行ったが、同様の項目で状況的コーピングを測定した場合に、Folkman¹⁵⁾が指摘するような内的整合性の低下が検出されるかどうか注目される。

また、Lazarusら²⁾は「対処の定義は、結果にかかわらず、ストレスフルな要求を処理しようとする努力を含めなければならない…(中略)…ストラテジーの適切さは、ある出来事における効果や長期的な効果によってのみ決定される」と指摘している。この指摘は、コーピング尺度の信頼性と妥当性の問題のうち、構成概念妥当性の検証に関連するものと言える。いずれのコーピング・ストラテジーが適応的であり、不適応的であるかは、コーピング尺度自体の構成概念妥当性が確認され

た後の検討課題である。したがって、他の尺度との併存的妥当性を示すことが、コーピング尺度における構成概念妥当性を示すに不十分であるのと同様に、精神病理に関する測度について弁別力をもつか否かを提示することも、コーピング尺度の構成概念妥当性の証拠としては不適切なものとなる。本研究においては、仲間評定法により、GCQ 特性版の4下位尺度のうち、感情表出、情緒的サポート希求、問題解決についての構成概念妥当性の証拠が示された。既存の尺度においては、このような証拠がほとんど示されていない点からも、これらの結果は意味あるものと言えるが、認知的再解釈については例外であった。認知的再解釈に限っては、その顕在性の低さにより、他者からの評定が困難であった可能性が考えられる。したがって、認知的再解釈の構成概念妥当性については、他の下位尺度と一律の手続きで検討することは困難であることが示唆され、このような性質のコーピング・ストラテジーを扱う場合、どのような検討方法を採用すべきかを吟味することが、今後の大きな課題として残された。

また、本研究では大学生を中心として尺度開発を行ったが、GCQ 特性版を大学生以外の成人に適用した場合の相違点について検討することも今後の検討課題である。

以上のように、一部検討課題が残されたものの、GCQ 特性版は我が国において高くその信頼性と妥当性が提示されたコーピング尺度と言える。今後この尺度を用いて、自己報告による心身の主観的健康度、生理的指標に基づく健康状態などをはじめとする適応指標との因果関係を様々な方向から検討することが望まれる。

本研究にあたり、金沢大学（現明星大学）吉村浩一先生、金沢工業大学塩谷 亨先生、石川健介先生、山上史野先生、神戸学院大学清水寛之先生、鳴門教育大学山下一夫先生、木内陽一先生、（現筑波大学）平田諭治先生、ならびに多くの学生の皆様、関係者の方々に御協力頂きました。この場をお借りして深く感謝申し上げます。

（受付 2001. 4.13）
（採用 2002. 3.18）

文 献

- 1) Folkman S, Lazarus RS. An analysis of coping in a middle-aged community sample. *Journal of Health and Social Behavior* 1980; 21: 219-239.
- 2) Lazarus RS, Folkman S. Stress, appraisal, and coping. New York: Springer, 1984; 117-140.
- 3) Suls J, David JP, Harvey JH. Personality and coping: Three generations of research. *Journal of Personality* 1996; 64: 711-735.
- 4) 日本健康心理学研究所. ラザルス式ストレスコーピングインベントリー. 東京: 実務教育出版; 1996.
- 5) Carver CS, Scheier MF, Weintraub JK. Assessing coping strategies: A theoretically based approach. *Journal of Personality and Social Psychology* 1989; 56: 267-283.
- 6) Folkman S, Lazarus RS. If it changes it must be a process: Study of emotion and coping during three stages of a college examination. *Journal of Personality and Social Psychology* 1985; 48: 150-170.
- 7) Folkman S, Lazarus RS, Dunkel-Schetter C, et al. Dynamics of a stressful encounter: Cognitive appraisal, coping, and encounter outcomes. *Journal of Personality and Social Psychology* 1986; 50: 992-1003.
- 8) Aldwin CM, Revenson TA. Does coping help? A reexamination of the relation between coping and mental health. *Journal of Personality and Social Psychology* 1987; 53: 337-348.
- 9) Aspinwall LG, Taylor SE. Modeling cognitive adaptation: A longitudinal investigation of the impact of individual differences and coping on college adjustment and performance. *Journal of Personality and Social Psychology* 1992; 63: 989-1003.
- 10) Bolger N. Coping as a personality process: A prospective study. *Journal of Personality and Social Psychology* 1990; 59: 525-537.
- 11) Tobin DL, Holroyd KA, Reynolds RV, et al. The hierarchical factor structure of the Coping Strategies Inventory. *Cognitive Therapy and Research* 1989; 13: 343-361.
- 12) Holahan CJ, Moos RH. Personal and contextual determinants of coping strategies. *Journal of Personality and Social Psychology* 1987; 52: 946-955.
- 13) 神村栄一, 海老原由香, 佐藤健二, 他. 対処方略の三次元モデルの検討と新しい尺度（TAC-24）の作成. *教育相談研究* 1995; 33: 41-47.
- 14) Amirkhan JH. A factor analytically derived measure of coping: The Coping Strategy Indicator. *Journal of Personality and Social Psychology* 1990; 59: 1066-1074.
- 15) Folkman S. Commentary to part three: Improving coping assessment: Reply to Stone and Kennedy-Moore. Friedman HS. Hostility, coping and health.

- Washington DC: American Psychological Association, 1992; 215-223.
- 16) Amirkhan JH. Criterion validity of a coping measure. *Journal of Personality Assessment* 1994; 62: 242-261.
 - 17) Billings AG, Moos RH. Coping, stress, and social resources among adults with unipolar depression. *Journal of Personality and Social Psychology* 1984; 46: 877-891.
 - 18) McCrae RR. Situational determinants of coping responses: Loss, threat, and challenge. *Journal of Personality and Social Psychology* 1984; 46: 919-928.
 - 19) Stone AA, Neale JM. New measure of daily coping: Development and preliminary results. *Journal of Personality and Social Psychology* 1984; 46: 892-906.
 - 20) Stanton AL, Danoff-Burg S, Cameron C. L, et al. Coping through emotional approach: Problems of conceptualization and confounding. *Journal of Personality and Social Psychology* 1994; 66: 350-362.
 - 21) Endler NS, Parker JDA. Multidimensional assessment of coping: A critical evaluation. *Journal of Personality and Social Psychology* 1990; 58: 844-854.
 - 22) Moos RH. *Coping Responses Inventory Manual*. Palo Alto CA: Stanford University and Department of Veterans Affairs Medical Centers, 1988. Cited from Stanton AL, Danoff-Burg S, Cameron CL, et al. Coping through emotional approach: Problems of conceptualization and confounding. *Journal of Personality and Social Psychology* 1994; 66: 350-362.
 - 23) 豊田秀樹 共分散構造分析入門編—構造方程式モデリング—. 東京: 朝倉書店, 1998; 170-188.
 - 24) Aldwin CM. Stress, coping, and development: An integrative perspective. New York: Guilford Press, 1994; 108-135.

DEVELOPMENT OF A DISPOSITIONAL VERSION OF THE GENERAL COPING QUESTIONNAIRE (GCQ) AND EXAMINATION OF ITS RELIABILITY AND VALIDITY

Megumi SASAKI* and Katsuyuki YAMASAKI^{2*}

Key words : A dispositional version of the General Coping Questionnaire (GCQ), Reliability, Validity, Four subscales, University students

Objective The purpose of the present study was to develop a dispositional version of a stress coping scale (the General Coping Questionnaire, GCQ), especially for university students, and examine its reliability and validity.

Methods In Studies I to IV, 124, 784, 83, 83 university students respectively completed the dispositional version of the GCQ. The questionnaire has four subscales covering emotion expression, emotional support seeking, cognitive reinterpretation, and problem solving, with a five-point Likert format. In Study IV, in addition to the dispositional version of the GCQ, peer rating was also performed to test the validity.

Results In Study I, 32 items were selected as a second version of the scale, reducing from the first version with 54 items. From Studies II to IV, evidence was obtained for the factorial validity, the internal consistency, the test-retest reliability, the construct validity (except cognitive reinterpretation), and the normal distribution of the scores.

Conclusions Standardization of the dispositional version of the GCQ with four subscales was essentially completed, facilitating future studies on coping with stress.

* Joint Graduate School in the Science of School Education, Hyogo University of Teacher Education

^{2*} Department of Human Development, Naruto University of Education